

## センター・ジャーナル

■発行人／蓮容 健  
■発行所／真宗大谷派名古屋教区教化センター

〒460-0016  
名古屋市中区橘二丁目8番55号  
TEL (052)323-3686  
FAX (052)332-0900



研究生第15期生は、教区・別院慶讃法要が執り行われる  
2027年度まで3年間学ぶ

「令和六年能登半島地震」の発災から二年が経過した。お正月のおめでたい空気が漂う中、あの日の辛い記憶と、今なお今後の生活に見通しが立たない不安を抱えておられる方が大勢いる。

能登といえ  
ば、東海地方  
と並んで真宗  
寺院の多い地  
域である。寺  
院関係の仲間  
の話では、能  
登地域のほと  
んどの寺院が  
被災し、特に  
奥能登では壊  
滅的な被害を  
被つておられ  
る。再建・修

研究生第15期生は、教区・別院慶讃法要が執り行われる  
2027年度まで3年間学ぶ

日々に世界が悪くなる  
生活しなきやと坐つたり  
寺院を取り巻く状況が悪くなる。これまで  
はダメだと焦るもの、具体的な  
一步が踏み出せない。とりあえず今でき  
ることを精一杯するしかない、居直つ  
てみても漠然とした不安は拭えない。

NHKの朝の連続テレビ『ばけばけ』  
の主題歌「笑つたり転んだり」(ハン  
バートハンバート 作詞・作曲..佐藤  
良成)の歌詞に共感してしまう。

日に日に世界が悪くなる

気のせいか そうじやない

そんなじやダメだと焦つたり

落ち込まないで 諦めないで

君のとなり歩くから

今夜も散歩しましようか

ちなみに、主題歌は、

と、締めくくられている。ドラマの内容

からしてこれは、夫婦のことなんだろう

な。と思いつつ、私は「あみださま」が

一緒に歩いてくれているんだろうな。な  
どと、勝手に励まされている。

皆様の叱咤激励をいただけたら幸甚  
に存じます。

(主幹 蓮容 健)

立つ!  
いのちの大地に  
聞く!  
いのちの叫びを  
眞美の学びから、  
命を生きる「人間」としての  
責任を明らかにし、  
ともにその使命を生きる者となる。

## もくじ

- ・公開講座  
釈尊の教説に見られる業 ❷・❸
- ・公開講座  
「満蒙開拓」の史実から ❹・❺  
学ぶもの
- ・研究報告  
聞法とグリーフケア ❻
- ・研修報告  
研究生第15期生始動 ❼
- ・仏教図書館 ❽
- ・INFORMATION ❾

## 教化センター主幹 就任のお知らせ

二〇二五（令和七）年九月一日付で、蓮容 健氏（第八  
組 蓮容寺住職）が教化センター主幹に就任しました。



はすい 蓮容 健 主幹

復の目途が立たないのは言うまでもなく、寺院の解散を考えておられる住職も多いという。もともとの過疎化に加えてのこの度の被災である。そもそも寺院を支えるご門徒方が地域におられないのである。

今、現に苦境に立たされているご寺院の問題は、近い将来の自坊の行く末についても問題を投げかける。過疎化の深刻さについては比べようもなく恵まれた状況にあるものの、ここ数年で進む少子化と独居老人世帯の増加は、私の預かっている自坊の周辺でも肌で感じている。もしこの地域で大震災が起きたらどうなるのか。そうでなくとも地域共同体の変容が進む中で、どうしたものかとため息ばかりをついている自分がいる。

教区・別院では、二〇二七年度に宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要を厳修することが決まった。今は、その基本計画を推進するための協議がはじまっている。教区が掲げる「不安に立つ」を憶念しつつ、真摯に教えに向かい、不安を抱える者が集い、共に宗祖の教えを確かめる場所としての教化センターを護持相続していきたい。

教区内には、新たな様々な試みをされている寺院がある一方で、焦りはあるものの何をしていいか分からぬ方もおられる事だろう。そんな方々が出会い、共に学び考えることができる場所。時には愚痴を言い、不安な気持ちを口にできる場所。また時には、世代・職種を超えた他者との出会いによって刺激を受け、やつてみようかと思える場所。そんな教化センターになることを願う。

教区・別院では、二〇二七年度に宗祖親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要を厳修することが決まった。今は、その基本計画を推進するための協議がはじまっている。教区が掲げる「不安に立つ」を憶念しつつ、真摯に教えに向かい、不安を抱える者が集い、共に宗祖の教えを確かめる場所としての教化センターを護持相続していきたい。

公開講座  
2025年6月13日特別講座 抄録  
釈尊の教説に見られる  
業をめぐる言説

箕浦 晓雄氏（大谷大学教授）



まず初めに業についてこのように考へるということを、ある意味では結論として申してみます。第一に仏教における業は「行為」を意味する言葉です。仏教では身体行為や言葉によつて外側に発現されるものだけではなくて、心で思うことをも行為の範疇として業と呼びます。第二に仏教における業をめぐる教説は「仏道を歩む姿勢」を問題にしていると捉えておくべきです。第三に思想の問題としては、業は「希望を語るもの」でなければならないと考えています。この三点を念頭に置いてお話しします。

**初期経典に説かれる業の教説**

『小業分別經』というパーリ語で書かれ伝承されてきた初期仏教經典を確認してみます。この經典では、「劣性・優性」「短命の者・長命の者」「貧困の者・富裕の者」など人間における区別が業（行為）の結果としてあるのだと語られています。

青年よ、衆生たちは、業を自己とし、業を相続者とし、業を胎とし、業を親族とし、業を拠り所とするものである。業が、衆生たちを、すなわち劣性と優性に区別する。

〔小業分別經〕(Majjhima-nikaya 99, PTS)

これらには、殺生を行つた者は短命になる、殺生を離れたものは長命の者になるなどと語られています。この語りをどうに受けとめていたらよいのでしょうか。時に私たちは、地位や名譽や財産などを獲得して成り立つて自らの境涯を喜びます。また、獲得してきたものが老病死によつて奪い去られる」とは、悲しみや苦しみになつてきます。このように今現在の境涯を喜んだり悲しんだりすることがあるわけですね。その意味で私たちは業に縛られています。こうした經典には、短命の者や長命の者がある、貧困の者や富裕な者があるなどと、これでもかと言わんばかりにいくつもの例が挙げられています。私たちが被つてゐる不条理を前にして為す術がなく、各々の境涯において仏道を成就していくような歩みが始まらないかのようであります。しかし、自由意志と両立しない強い決定論(hard determinism)が唱えられているわけではありません。この經典で挙げられる事例は、執着によつてその境涯における業に各々が結びつけられてゐるところを示してゐるところを読み解かなければならぬでしょう。衆生が限りなく様々な境涯に生まれることを示すために語られてゐます。業因業果のなかにいるということは、いかにも境涯を受け得ることだからです。まずもつてそれを受けとめる

心が準備されないかぎり、釈尊の教説は教説たり得ないのです。そして、この教説には仏道を成就していくような業（行為）によつてこそ、執着なき者へと転換していくことが含意されていると理解してよいでしょう。釈尊の教説を聞いた青年は、釈尊が「覆われたものの覆いを除くように」「迷つた者に道を示すように」「眼ある者は形を見るであるうと暗闇に灯火を掲げるように」法を説いてくださつたと喜んでいます。苦悩を引き起こすような業（行為）をなす者と、苦悩を超えていくような業（行為）をなす者が対照的に語られているということです。

〔ヴァーセッタ經〕(改訂大乗の仏道資料編) 参照: *Suttanipata* 39, PTS版生まれではなく業（行為）に  
よつてブーラーフマナになる

『ヴァーセッタ經』もまた、パーリ語で書かれて今日まで伝承されてきた初期經典です。冒頭でブーラーフマナの青年ヴァーセッタとバーラドヴァージャとの間で「どのようにしてブーラーフマナになれるのか」「生まれによつてか、業によつてか」という議論が起つたと言います。そこでこの二人の青年は釈尊に見解を尋ねに行くことになり、釈尊が説いたことが順に語られています。まず初めに、草木には生まれからくる区別(jati-bheda)のしるしがあると語られていました。一方、人間には生まれからくる区別のしるしがないのだと語っています。

まことに、自らの苦の消滅を知り、重荷をおろし、繫縛を離れた者、その人を私はブーラーフマナと申します。(六二六偈)

における差異は名称によるのだと言います。

人間のなかで、牛を飼つて生活するものはみな、彼は農夫であつて、ブーラーフマナではないと、ヴァーセッタよ、このように知るがよい。(六一  
二偈)

人間のなかで、種々の技能で生活するものはみな、彼は職人であつて、ブーラーフマナではないと、このように知るがよい。(六一  
三偈)

人間には本来は生まれからくる区別はないにもかかわらず、ブーラーフマナだとかクシャトリヤといつて相違が生じてしまつてゐることになるんだと言つてます。ここでは、名称によつて呼ばれてることで区別されるような差異が世間にはあると例示されています。こうした記述に基づけば、例えば、社会的差別を受けて苦しんでいる人を卑しい人だとか醜い人などと呼ぶ理由は本来何もないといふ姿勢を教説は持つてゐるわけです。私たちが自らの尺度で生みだしたものにすぎないということです。続いて、例えば次のように、どのような者がブーラーフマナであるのかを示す文言がいくつも記されています。

深い智慧あり、聰明で、道と非道をよく知り、最高の目的に達した者、その人を私は「ブーラーフマナ」と言う。(六二七偈)

(前掲書参照)

「ブーラーフマナ」とは、本来はヴァルナ体制(古代インドの身分制)における最高位の者を指して使う言葉です。しかし、この箇所では「ブーラーフマナ」という言葉が持つ伝統的な意味を転換して、「仏道を成就した者」の意味で使われています。初期経典のなかではこの「ブーラーフマナ」という言葉が、仏道における求道者や、仏道を達成した者すなわち仏陀の意味で用いられている場合がいくらでも見つけられます。仏教の側から、こういう者こそが眞の「ブーラーフマナ」と言つてゐるということになります。そして、「ブーラーフマナ」「クシャトリヤ」、あるいは、このブーラーフマナの青年の名前である「ヴァーチセッタ」などは、世間の慣習からくる呼び名にすぎないのだと言います。

というのは、これは世間における名称であつて、名や姓はつけられたものだからである。世間の認容によつて生じたものであり、その時ごとにつけられたものである。(六四八偈)

知らないものたちに、謬見が長い間にわたつてひそんでゐる。知らないものたちは、我々に言う。生まれによつて「ブーラーフマナ」になるのだと。(六四九偈)

潜んでいるのだというわけです。だから、気が付いていない者たちは、呼び名にすぎないにもかかわらず「生まれによつてしまつてゐるのだ」と語つてしまつてゐるのだということです。このことを踏まえて次の言葉が提示されます。

生まれによつて「ブーラーフマナ」になるのではなく、生まれによつて「ブーラーフマナ」ではないものになるのではなく、のではなく、生まれによつて「ブーラーフマナ」ではないものになる。 (六五〇偈)

(前掲書参照)

この文言をご存じの方がおられましょう。特に社会的な差別の問題が語られる時に、よく引き合いに出される経典の文言です。この前後に書いてあることを注意して見ながら、読む必要があると思ひます。続いて「このように、知者たちは、この業(行為)をありのままに見る」と言われます。誤った見解が潜んでいて実際に知らない者とは対象的に、知者たちは業をありのままに如実に見ると説かれているわけです。これはもちろん仏陀の眼差しを語るもので、そして、私たちが業によつて繋ぎとめられているからこそ、最も優れた業(行為)、すなわち仏道を成就していくような業(行為)によつてこそ、最も優れた生存がありえるということを語るのです。ヴァルナ体制そのものを真正面から否定するような語り方ではないのですが、いかなる者も仏道を歩んでいけることを語るこの眼差しを語るのではありません。石原吉郎というシベリア抑留体験を持つ詩人がこのような言葉を残しています。「自らを凝視する勇気のないところからついにいかなる希望も湧いては来ない」「自分の現実の姿を承認することなしには、私にとつてはどんなささやかな前進もありえないだろう」(石原吉郎『望

と確かめておく必要があると思ひます。」と確かめておく必要があると思ひます。

## 仏道を歩むことができる

郷と海』筑摩書房、二〇〇一年)。こうした発言は、業論の主題を考える上でも示唆的です。

業をめぐる教説には、まずは苦惱の存在することを立ち止まつて認識してみるという視点があります。同時に、苦惱を超えて歩み出そうとする姿勢を持つと与えてくれる釈尊の眼差しが示されます。初期経典の語りを見る限り、不条理な境遇をただあきらめるしかないと言つてゐるわけではないのです。それはかりか、私たち人間が抱えているあらゆる状況すべてを一つの業因業果として全般的に説明できると言つてゐるわけではありません。つまり、業をめぐる言説は、世界の現象を説明するための因果関係の一般原則としての語りではありません。仏道を歩む者に視点がおかれてゐる語りのなかで用いられてゐるということです。だからこそ、業をめぐる言説は希望を語るものでなければならないと考へております。特に今回強調したかったのは、どのような者でも自分の生涯を歩み、仏道を歩んでいくことができるという眼差しを仏教は確かに持つてゐるということです。古代インドの仏教徒たちは、そういったことを大事にして経典を紡ぎ出し、伝授してきたのだと思ひます。そして、チベットで展開した仏教も、中央アジア、あるいは東アジア地域で展開した仏教も、そしてこの日本で展開してきた仏教も、親鸞聖人も、その眼差しを掴み取りながら来たのではないでしようか。そのような見通しを持つて学んでみるということは、あながち間違ひではないと思つています。

公開講座  
2025年3月19日平和展特別学習会 抄録  
「満蒙開拓」の史実から学ぶもの寺沢 秀文氏  
(満蒙開拓平和記念館館長)

## なぜ開拓団は渡つたのか

開拓団がかつての「満州」に渡つていった理由については、大きく分けて三つに整理できます。

「満州国」と「満蒙開拓」  
私は全国で唯一の「満蒙開拓」に関する記念館の館長を仰せつかっております。私は全国で唯一の「満蒙開拓」に関する記念館の館長を仰せつかっております。

一民間人であり、歴史の研究者ではございませんが、元「満蒙開拓団」員であった両親を持ち、終戦の冬に兄を現地で亡くしています。二世としてこれまでに三回以上現地に足を運び、多くの方々からお話を聞いてまいりました。本日はその「満蒙開拓」の歴史についてお話をさせていただきます。

かつて日本は、現在の中国東北地方に「満州国」という国を作りました。一九三二（昭和七）年、一九四五（昭和二十）年の間です。ここに日本全国から約七万人という「満蒙開拓団」が渡つて行くことになります。

族、日本人）を掲げましたが、実態は日本が支配する傀儡国家であり、中国では「偽満」（偽の「満州国」）と呼ばれ、民族差別や植民地的な要素を伴っていました。この「満州国」には百七十万とも二百万とも言われる日本人が入つていきました。

本国内の「人口を減らす」という要素がありました。当時、特に農村部は世界大恐慌の影響で貧困にあえぎ、子沢山の農家が多かったため、「満州」へ行けば広い農地が手に入るとの誘因があり、国内の困窮対策としての側面もありました。そして第三に、これがかなり大きな理由を占めるのですが、軍事的な目的です。開拓団は戦争の末期に入つて、いざな開拓団ほど北の方、「ソ満国境」の危険な方へと送り込まれていきます。ソ連に対する人間の防波堤、人間の盾として送り込まれていきました。

「満蒙開拓」は当時の国策として強力に推進され、一九三六（昭和十二）年には二十年間で百万戸、五百万人を送り込む計画まで立てられました。国や地方自治体、教育界、各種団体が送出に関与し、貧しい農村には経済的な援助と引き換えに分村・分郷開拓団の送出が促されました。この「満州」への移民は、南米などへの移民とは異なり、国策としての軍事的な目的を加えて、現地の人々にも多大な被害を与える形での「開拓」であつたことを理解しなくてはいけません。約二十七

万人の開拓団のうち、約八万人が現地で亡くなるか、残るといふ大きな犠牲を出しました。

## 開拓団の入植と宗教の関与



旧「満州国」地図

開拓団が入植した多くの場合、山林原野を開拓したのではなく、元々そこに住んでいた中国人の家屋や畠を非常に安い値段で買い上げて入つて、いたため、現地の人々は日本人を内心では恨んでいました。このことが、後にソ連侵攻時などに開拓村が襲撃される一因となります。

現地の中国の方と話をしていると、あるいは開拓団じやなくて「侵略移民団」だとはつきり言われたことも何回かあります。私たちの記念館では、日本人側の被害と、現地の人々に対する加害という両面にきちんと向き合うことを一番大切な柱としています。

開拓団は一九三二（昭和七）年を第一次として、一番最後の開拓団は終戦の年に送り込まれております。送り出した時期によつて組織の分類の仕方が異なつており、第一次の「弥栄村開拓団」や第二次の「千振開拓団」など、初期の開拓団は「試験移民」や「武装移民」と呼ばれ、元軍隊経験者を主体としていました。

この「弥栄村開拓団」は多くの犠牲者を理解しなくてはいけません。約二十七



武装移民

（満州族、朝鮮族、モンゴル）  
（漢民族、

「満州国」は理想の国を作るとい

うスローガン「五族協和」  
（漢民族、



## 青少年義勇軍募集ポスター

り本皆でよてと者や書

を出したのですが、その「弥栄村」には「弥栄布教所」というお寺が建立されました。真宗大谷派本龍寺のご住職である本多賢純さんが「弥栄村」に入り建立したのです。現在、本龍寺境内（東京都台東区）には「弥栄村」の村民殉難者の碑という慰靈碑があります。

当時「満州」には仏教をはじめ宗教界からも色々な関与がありました。東本願寺や西本願寺など多くの宗派が、布教のため、あるいは開拓団そのものとして入っていました。他にも、賀川豊彦らが中心となって送り込んだキリスト村開拓団天理村開拓団（天理教）、佛立開拓団（本門佛立宗）といった宗教団体による開拓団も存在しました。

## 敗戦と置き去り

戦争末期になると、開拓団からは十八歳から四十五歳の男性が「根こそぎ動員」で召集されます。その間に一九四五年（昭和二十）年八月九日、中立条約を結んでいたはずのソ連が突然「満州」へ攻め込んできます。開拓団の人々は、日本軍（関東軍）が守ってくれると信じていましたが、日本軍はソ連軍の追撃を避けるため

を出したのですが、その「弥栄村」には「弥栄布教所」というお寺が建立されました。真宗大谷派本龍寺のご住職である本多賢純さんが「弥栄村」に入り建立したのです。現在、本龍寺境内（東京都台東区）には「弥栄村」の村民殉難者の碑という慰靈碑があります。

当時「満州」には仏教をはじめ宗教界からも色々な関与がありました。東本願寺や西本願寺など多くの宗派が、布教のため、あるいは開拓団そのものとして入つていきました。他にも、賀川豊彦らが中心となつて送り込んだキリスト村開拓団（天理村開拓団（天理教）、佛立開拓団（本門佛立宗）といった宗教団体による開拓団も存在しました。

## 敗戦と置き去り

民（在外邦人、外国人にいる日本人）は出来得る限り定着の方針を執る」。つまり現地にとどまれ、と言つてゐるわけですね。そして一ヶ月後日本軍參謀名で出された文書には、「満鮮」に土着する者（「満州」や朝鮮にとどまる者、今後住もうとする者）は日本国籍を離るるも支障なきものとす」と、平たく言えば日本国籍を捨ててもいいから現地にとどまつて生き延びよと言つてゐるよう受けとめることもできるわけです。このため、残留孤児の皆さんは「守つてくれると思つていた日本軍はいなくなつてしまつた。日本に帰りたかつたのに中国に置いておかれた。よ

に取り組む原点です。残留孤児の多くは、苦難の末、日中國交回復後の長い年月を経てようやく帰国できましたが、その命を救い、育ててくれたのは中国人の養父母でした。私たち日本人はこの事実を忘れてはいけません。中国に残されている日本人の公墓は、「方正日本人公墓」たつた一つのみしか許されていないことも知つていただきたいです。この「満蒙開拓」という歴史は、日本人として決して忘れてはならない、二度と繰り返してはならない歴史です。学校などで語られることが少なかったのは、ある意味、多くの人々にとつて不都合な歴

度と悲しい犠牲者を出さないためです。「満蒙の記憶 私も受け継ぐ」ということで、記念館では地元の高校生がボランティアとして展示ガイドに取り組む活動もしています。

私たちがこの歴史を語り継ぐことは、明日の平和のための「平和の種まき」であると信じています。若い世代には、近現代史をしつかり学び、かつて日本がアジアの中はどう過ごしたかを理解してほしいと願っています。

講義の模様を当センターYouTubeチャンネルで公開しています。

「在満邦人」の帰国が本格化したのは終戦翌年の一九四六（昭和二十一）年五月以降でした。日本に帰つても行く場所のない引揚者は、再び故郷を離れて国内の開拓地に入植し、荒地の開墾から新たな生活を始めました。私の父もシベリア抑留から帰還し、母は夫の帰りを待ちながら長野の開拓地に入植していました。父は、戦後の開墾の苦労を通して、「かつて自分たちの大切な農地や畠を日本人によって奪われてしまった、現地の中国の農民たちの悲しさや悔しさがよくわかった」、「あれは日本の間違いであった」と語りました。これが、私が記念館の活動に取り組む原点です。

残留孤児の多くは、苦難の末、日中国交回復後の長い年月を経てようやく帰国できましたが、その命を救い、育ててくれたのは中国人の養父母でした。私たち日本人はこの事実を忘れてはいけません。中国に残されている日本人の公墓は、「方正日本人公墓」たつた一つのみしか許されていないことも知つていただきたいです。この「満蒙開拓」という歴史は、日本人として決して忘れてはならない、二度と繰り返してはならない歴史です。学校などで語られることが少なかったのは、ある意味、多くの人々にとつて不都合な歴史を訴えられているのです。

史であったからかもしれません。しかし「不都合な事実に目を瞑るのは再び同じ過ちを繰り返す」のが歴史です。

現在の長野県下伊那郡の阿南町、当時の大下条村の村長であった佐々木忠綱さんは村から開拓団を出すことに最後まで抵抗しました。国策に対し「おかしいものはおかしい」と反旗を翻した方がいらっしゃったということにも私たちは学ばなければならぬと改めて思うわけでございます。

あるアジアの青年から「やっぱり日本人は信用できない。それはかつて日本が私たちの国を侵略したからではなくて、今日本人がかつて日本が何をしていたということを知ろうとしないからだ」と言われた時には、正直頭をガンと打たれる思いがしました。やはり私たちはきちんと子どもたちに伝えていかなくてはいけません。私たちがこの歴史を学ぶのは、新たな憎しみや対立を生むためではなく、二度と悲しい犠牲者を出さないためです。

「満蒙の記憶 私も受け継ぐ」ということで、記念館では地元の高校生がボランティアとして展示ガイドに取り組む活動もしています。

私たちがこの歴史を語り継ぐことは、明日の平和のための「平和の種まき」であると信じています。若い世代には、近現代史をしつかり学び、かつて日本がアジアの中でどう過ごしたかを理解してほしいと願っています。

史であつたからかもしれません。しかし「不都合な事実に目を瞑るものは再び同じ過ちを繰り返す」のが歴史です。

うやく日本に帰つてきても日本の人々は  
私たちのことを異邦人のような目で見た」  
と言って、国から三度捨てられたということ  
を訴えられているのです。

史であつたからかもしません。しかし「不都合な事実に目を瞑るものは再び同じ過ちを繰り返す」のが歴史です。

の大下条村の村長であつた佐々木忠綱さんは村から開拓団を出すことに最後まで抵抗しました。国策に対し「おかしいものはおかしい」と反旗を翻した方がいらっしゃったなどといふことも私も学ばなければならぬと改めて思うわけでございます。

「在満邦人」の帰国が本格化したのは終戦翌年の一九四六（昭和二十二）年五月以降でした。日本に帰つても行く場所のない引揚者は、再び故郷を離れて国内の

のはおかしい」と反旗を翻した方がいらっしゃつしゃつたということにも私たちは学ばなければならぬと改めて思うわけでござります。

講義の模様を当センターYouTubeチャンネルで公開しています。

e

# グリーフケアと真宗教化③

## 研究報告 聞法とグリーフケア

吉田 晓正

### 学びから方向が見えてくる

グリーフケアという動きは、喪失による悲嘆についての研究とともに進められてきた。悲しみを抱える中に、どのような姿があり、どのようなプロセスをたどりながら生きていくのかということを、具体的に臨床の現場から人々の声を聞き、そこから検証と考察を重ね、グリーフのさまざまな姿が明らかにされてきた。このようなグリーフケアの研究と実践において課題とされたことは、仏教の課題と通じるものであろう。法として伝えられてきたことは、人として生まれたゆえに抱える苦悩に応じて説かれたものである。仏教もグリーフケアも、どちらも人間を生きる課題と向き合ってきた道であろう。その学びの中に、自らが問われ、ともにあることが問われ、そこに見えてきた課題をたずねてきた歩みがある。その課題を学び、確かめていくことによって、お寺として、僧侶として、人として歩んでいく方向が見えてくるのではない

### 生老病死に関わるグリーフ

仏教の課題は苦しみからの解放である。その苦しみの原因は生老病死の四苦といわれる。さらに、愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を加えて八苦ともいわれる。人として生まれたゆえに、老病死

を苦しみとして生きる。また、関係を生きるがゆえに生まれる苦しみがある。

生老病死はいのちの事実であり、誰も逃れることはできない。しかし、それが事実であると理解しても、実際に自分の身に現実の姿として突きつけられた時、私たちはとまどい、思つようにならないことに苦しむことになる。それは自分の身だけではなく、関係に生きるがゆえに、他の姿に出あう中で生じる苦悩もある。

「老」は若さを失うこと、「病」は健康を失うこと、「死」は存在を失うことである。そこには喪失による反応や影響が生じ、悲しみや苦しみを抱えることになる。そこにグリーフの課題がある。このような人間の根本的な課題に對して、釈尊は丁寧に法を説かれた。一人ひとりの苦悩の姿に応じて、言葉を選びつつ、その人が歩み出していけるように。

実際に、老病死の問題については、釈尊自身が晩年の旅において、自らの姿を通して仏弟子たちに法を説かれた様子が、『大般涅槃經』という原始経典に伝えられている。特に、釈尊の説法の旅の侍者であつた阿難の姿には、喪失の現実に揺れ動くグリーフの姿が丁寧に描かれている。

最後の旅の中で、釈尊が老いていく姿、病に伏す姿を目の当たりにし、いよいよ入滅が近いという現実を前に、大きな悲嘆に苦しむことになった。

釈尊は、「諸行無常」を繰り返し説いてきた。あらゆるものは止まることなく移り変わること。形あるものは滅びゆくものであること。生まれてきたいのちは必ず死すべきのちであること。おそらく阿難が釈尊のそばで何度も聞いてきた教えであろう。しかし、目の前の釈尊の老病死という現実を突きつけられた時、大切な存在を失ってしまう不安や恐れから、その事実を認められず、大きな悲嘆を抱えることになった。

常に釈尊のそばで、さまざまな課題についてたずねながら聞法してきた阿難にとって、その存在を失うことは、自分のよりどころと歩む道を失うことと同じであつただろう。嘆き悲しむ阿難に対して、釈尊は、諸行無常であることを繰り返し丁寧に伝えながら、これまで仕えてくれたことに感謝し、これからも努め励んで修行することを促し、やがて覺りに至るであつたことを告げられた。

諸行無常であると何度も聞いてきた阿難であつたが、釈尊を失うという現実はあまりにも大きく、その教えに頷くことができない。大切な存在の喪失は、それほど大きな影響を与える。その人間の苦悩にこそ説かれたのが仏法ではないか。自分の思うように法を聞くのではなく、その自我心を破り、自分の根にある問いに法がはたらく。それが真に法に出遇うと

た。それは次のようないいふで伝えられてゐる。

この世で自らを島とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ。<sup>1</sup> ある。他人に依存せず、自分自身が問い合わせるがゆえに生まれる苦しみがある。

阿難が釈尊のそばで何度も聞いてきた教えであろう。しかし、目の前の釈尊の老病死という現実を突きつけられた時、大切な存在を失ってしまう不安や恐れから、その後に説かれたのが次の言葉である。

さあ、修行僧たちよ。お前たちに告げよう、「もろもろの事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完結なさい」と。<sup>2</sup>

最後の説法も諸行無常であることを伝えられた。そして「怠ることなく」という言葉は、繰り返し法をよりどころとしてたずね続けていくことを促している。

生老病死に關わるグリーフは、誰もが経験し、歩む道を見つけようと迷い、悩むことがあるだろう。分かつていてもその通りには生きられないことに苦しむのはおかしなことではない。だからこそ、その自分を受けとめてくれる場とたずねていく方向を開く道として仏法が説かれた。諸行無常であるということは、グリーフが迷いや苦しみのままではなく、グリーフとともに生きる自分にもなれるということである。阿難は、釈尊入滅後、仏典結集によつて経典を通して法をたずね続けていく聞法の道を歩んだ。釈尊を失つた悲しみとともに。

阿難は、釈尊入滅までの二十五年間、誰よりも釈尊のそばで説法を聞いた多聞第一といわれた仏弟子である。その阿難が、

釈尊は、阿難の悲嘆の姿に応じて、時には真っ直ぐに教法を伝え、時にはその悲しみを受けとめながら励まし、阿難自身が仏道を歩んでいく方向と道を示され

<sup>1</sup> 『ブッダ最後の旅』中村元訳 岩波文庫  
<sup>2</sup> 六五頁

## 研修報告

## 研究生第15期生始動

2025年7月より、教化センター研究生第15期生が始動した。教区内の僧侶・寺院関係者および門徒からなる全13名が、講師やスタッフとともに3年間学んでいくことになる。今回は研究生第15期生にかけられた願いと、今年度のカリキュラムを紹介する。

## 第15期生の学び

研究生制度は、研究生が主体的に学ぶことを目指している。しかし、それは決して一人だけで学ぶことを意味するのではない。お互いの意見を尊重し合い、自らの姿を問い合わせることによって、研究生一人ひとりの学びとなっていくことが望まれているのである。第15期生に応募動機をたずねたところ、現在の寺院を取り巻く状況に危機感を覚えていることが伝わってきた。この問題意識を大切にして「どこに視座を置き、何を目標にすべきか」という課題に向き合い、これから教区や寺院のあり方、そして自分は何ができるのかをともに考える学びにしていきたい。その学びの中で自らの歩みを見出すことを通して、お寺や教区で活躍する「人」の誕生が願われている。

## カリキュラム紹介

僧俗ともに聞法し、教化センターや教化委員会、別院の活動に触れていく。

テーマ (学習会名)	『聖典』に学ぶ
内容	講師の課題と研究生の疑問を『真宗聖典』に立ち返って尋ねる 今年度は特に「和讃」をテーマに講義を聴講し、座談を行う
担当講師	市野 智行 氏（同朋大学准教授） 小川 正幸 氏（第22組 碩朋寺住職）

テーマ (学習会名)	教化センターの研究課題に学ぶ
内容	・大谷派の近現代史「平和展」 ・尾張の真宗史 ・現代社会と真宗教化「グリーフケア」
担当講師	センター業務嘱託（研究）

テーマ (学習会名)	公開講座 聴講
内容	教区、センター主催連続講座の第1回を聴講する ※第2回以降は自主参加
担当講師	・「解放運動推進要員研修」（第1回） 上杉 聰 氏（じんけん SCHOLA 共同代表） ・「聖典研修」（第1回） 鶴見 晃 氏（同朋大学教授）

テーマ (学習会名)	報恩講を勤める
内容	・報恩講について学ぶ ・お勤めのお稽古 ・別院の報恩講に参拝（レポート提出） ・教化センターの報恩講とともに厳修
担当講師	・報恩講について 様山 正樹 氏（第9組 教西寺住職）

テーマ (学習会名)	実践研修
内容	・ファシリテーター研修 座談会、対話の大切さを知る研修 ・フィールドワーク 研究生、スタッフで相談しながら内容検討

テーマ (学習会名)	本山で学ぶ
内容	・真宗本廟奉仕団「私にとって真宗本廟とは」 寝食をともにする宿泊研修（1泊2日） ・事前学習として、宗派について学ぶ
担当講師	・宗派について学ぶ 蓮容 健 主幹

※学習日程は8面参照

## 【第15期 研究生】

伊藤 瑞樹（第20組 正賢寺）  
稻垣 大智（第20組 慈法寺）  
稻垣 元彬（第32組 西蓮寺）  
加賀 寺顕（第7組 徳善寺）  
佐藤 芳美（第26組 正林寺門徒）  
田中 田実（第2組 田中寺）  
富永 齊（第18組 養念寺）  
中野 了（第11組 玉泉寺）  
成瀬 佐恵子（第30組 泉称寺）  
英 貴志（第2組 東光寺）  
舟木 誠（第30組 一心寺門徒）  
森 一（第20組 善行寺）  
山内 崇（第3組 淨休寺）  
(50音順)



学習会の様子



講義の内容をもとに  
座談を行う

## 仏教図書館だより

佐藤芳美氏（第15期研究生／参議会議員：写真左側）より、このたび東本願寺出版より発刊された『坂東本 教行信証』（カラー影印縮刷本）を寄贈いただきました。原則として貸出はしませんが、いつでも教化センターで閲覧できますので、親鸞聖人の肉筆に触れ、思索の過程を感じていただきたいと思います。



## 図書整理

2026年1月8日（木）～28日（水）

期間中は図書・視聴覚教材の貸出は行いません。

## 研究業務報告（2025年6月～11月）

## ①大谷派の近現代史

- ◆「あいち・平和のための戦争展」に出展  
同実行委員会主催  
8月14日～8月17日
- ◆平和展学習会 実施  
6月3日・6月30日・7月25日・8月8日・8月27日・  
9月16日・10月9日・10月22日・11月5日・11月20日

## ②尾張の真宗史

- ◆「真宗の葬儀」研究・学習班 学習会 実施  
8月6日・9月19日・10月15日・11月18日
- ◆フィールドワーク  
11月14日  
伝統的な火葬場である「サンマイ」跡の調査をするため、第11組間源寺へ伺った。  
次号以降に報告予定
- ◆御消息を読む会  
歴代門首の御消息などを解読する定期学習会です。参加希望の方はご連絡ください



## ③現代社会と真宗教化

- ◆グリーフケア研究・学習班 学習会 実施  
6月16日・8月27日・9月17日・10月22日・11月12日
- ◆学習テキスト『御同朋を生きる』を通して、当センター関係者による「是旃陀羅」問題の学習 実施  
6月25日・7月24日・8月5日・9月12日・10月14日・11月26日
- ◆特別講座「釈尊の教説に見られる業をめぐる言説」  
開講（6月13日／教務所1階 議事堂／約40名聴講）  
講師：箕浦 晓雄氏（大谷大学教授）
- ★2、3面に講義抄録を掲載

## ④真宗の仏事

- ◆真宗の仏事 研究・学習班学習会 実施  
6月10日・7月10日・8月29日・10月1日・11月4日

## ⑤『教化センター研究報告』第14集 発行

(6月28日)

- ◆第1部〈研究報告〉  
尾張の真宗 法宝物資料調査報告（その2） 小島 智  
グリーフケアと真宗教化 吉田 晓正
- ◆第2部〈講義録〉  
2021年度 名古屋教区「聖典研修」  
「南無阿弥陀仏～六つの視座から考える～」  
福田 琢・織田 顯祐・鶴見 晃・  
蒲池 勢至・市野 智行・安藤 弥  
※東別院公式HP「お東ネット」でも公開  
しています



『雑感』所属寺院にて「地域のつながり」をテーマとした行事を開催した。地域福祉のためには「ゆるいつながり」の形成が必須であると考える。つながりと言わると鬱陶しいと感じるかもしれないが、「一人でいてもよい」と思える場を獲得することもつながりの一つの形であると思う。その一方で、人や場とつながるということは、誰かを傷つけ、自らが傷つく可能性を常に伴う。当センターもつながりを生み出す役割を担いつつ、そこから生じる痛みや孤独を抱える人々とともに歩む場となることを目指したい。(た)

## ■教化センター

〈開館〉月～金 10:00～21:00  
〈貸出〉書籍2週間 視聴覚1週間



教化センターSNS

## ■名古屋別院・名古屋教区・教化センターホームページ

[お東ネット] <https://www.ohigashi.net> お東ネット 検索

■お東ネット内で、教化センター所蔵図書・視聴覚教材を検索できます。

## 研修業務報告（2025年6月～11月）

## ①聖典研修

- 講師：鶴見 晃氏（同朋大学教授）  
第1回 10月10日 約90名聴講

## ②研究生

- ◆開講式  
7月2日
- ◆『聖典』に学ぶ  
講師：市野 智行氏（同朋大学教授）  
8月22日・9月26日・11月13日
- 講師：小川 正幸氏（第22組 碓朋寺住職）  
7月30日・10月30日
- ◆センター研究業務に学ぶ  
講師：小島 智氏（業務嘱託〔研究〕） 7月14日
- ◆公開講座聴講 ※講師は7面参照  
・聖典研修（第1回） 10月10日  
・教区解放要員研修（第1回） 11月11日

## ◎慶讃法要へ向けて

- 2028年4月に厳修される教区・別院慶讃法要に向けた準備委員会において、当センターは教化部会を担当する。慶讃法要の教化を企画することを通して「教化の広場（サロン）」づくりに取り組んでいく。
- ・教化部会会議  
9月12日（事務会議）、10月21日、11月21日

## INFORMATION

## ◆公開講座

- ・聖典研修「『觀無量寿經』の教え 「觀經和讃」を通して」  
講師：鶴見 晃氏（同朋大学教授）  
時間：午後6時～8時  
会場：教務所1階 議事堂  
期日：（全5回）  
第2回 2025年12月9日（火）  
第3回 2026年2月24日（火）  
第4回 4月7日（火）  
第5回 6月2日（火）  
第1回の様子（10月10日）
- ・グリーフケア公開学習会「グリーフケアの基礎について（仮）」  
講師：未定  
期日：2026年2月18日（水）  
時間：午後3時～5時  
会場：教務所1階 議事堂
- ・真宗の葬儀公開学習会「なぜ葬儀・法事を勤めるのか（仮）」  
講師：海 法龍氏（真宗大谷派 長願寺住職）  
期日：2026年3月27日（金）  
時間：午後3時30分～5時30分  
会場：教務所1階 議事堂
- ・平和展特別学習会  
2026年3月頃開催予定

## ◆第37回 平和展 2026年3月17日（火）～23日（月）

- 「真宗大谷派の海外侵出－華中開教－」  
平和展は過去の侵略加担の事実を見つめ、「兵隊も武器も必要ない」と説かれた釈尊の教えに生きる私たちのあり方を、あらためて問うことを目的とした展示会です。今年度は7年にわたるシリーズ「真宗大谷派の海外侵出」の最終回として「華中開教」をテーマに開催します。